

人生の最後の仕上げとなる大切な老年期を、教会で支援できないだろうか。高齢の信徒や司祭・修道者を支援する教会のシステムづくりについて考えるシリーズ。第3回は、岡山県赤磐市の自宅を開放し、高齢司祭・信徒らの生活空間をつくらうとしている岡山教会の長門桂子さん(86)。長門さんは、賛同者を募り、引退司祭や高齢の信徒らが、老後、少ない年金でも暮らせるような「終(つい)の家」を構想中だ。

長門さんの自宅は、こうだ。

岡山駅からバスで40分——所有する2千坪ほどの山や田園に囲まれた桃の産地、赤磐市活用し、可能な限りのにある。結婚してから自給自足型の「ごちん長年、兵庫県尼崎市にまりとした共同体」生活を送る。大自然の中で働いていた長門さんで農作業を行い、まただが、夫を看取って2年後の2005年、趣味や特技を生かして「終の家」を実現させたいと、赤磐市の生家活動に寄与する。共参画型の「ピンピンコ」に戻り、一人暮らしをしていくのだ。

岡山からバスで40分——所有する2千坪ほどの山や田園に囲まれた桃の産地、赤磐市活用し、可能な限りのにある。結婚してから自給自足型の「ごちん長年、兵庫県尼崎市にまりとした共同体」生活を送る。大自然の中で働いていた長門さんで農作業を行い、まただが、夫を看取って2年後の2005年、趣味や特技を生かして「終の家」を実現させたいと、赤磐市の生家活動に寄与する。共参画型の「ピンピンコ」に戻り、一人暮らしをしていくのだ。

「老い」を支える教会へ 少ない年金で暮らすために 自宅開放して「終の家」つくりたい

と死ぬという意味)を、とも外国人」目標にした生活だ。4と言われまし万円は生活費として集め、残りは各自の小遣いになる。

食事は毎食、青汁、玄米、豆腐がメインで、それに「タケノコ」などの木の芽和えなど一品を添えるという簡素なもの。食材は、地域住民の手を借りたり、入居者が輪番で担当したりして作る。健康な体を維持するために、できるだけ各自が体を

阪・香里教会の一級建築士の信徒に既に作成してもらっている。長門さんは、こうして共同生活を思い付いた理由をこう話す。「約30年前、母の埋骨の時に来てくださったベルギー人の神父様(淳心会)が、ふと寂しそくに『私は、日本では外国人、母国へ帰らないかと推察した。』

「約30年前、母の埋骨の時に来てくださったベルギー人の神父様(淳心会)が、ふと寂しそくに『私は、日本では外国人、母国へ帰らないかと推察した。』



長門桂子さんは「早くしないで」と賛同を呼び掛けている

宣教にも一役

37年前に乳がんを患い、近年、膝関節などの手術を受けた長門さんはこう話す。「早くしないと、私たちはどんどん歳を取ります。賛同者が集まって構想を練り、全国各地にこうした共同生活の場をつくるのができれば、と思うのですが…。この夢が夢で終わらないように、協力者も資金も集まって実現できるように祈っているところです」

「司祭の召命のために祈るならば、司祭の老後の保障もしていけないといけないと思いません。最後までしっかりと守りできる体制が日本の教会では整っていない状況です。それがない状況です。それで信者が工夫しなければなりません。司祭に参加できない近隣の信者が集うことにより、大規模な施設をつくるのは困難です。それが、入居者らをして自作の野菜などを近隣住民に買ってもらうたり、入居者それぞれの特技や才能を生かして、語学などのカルチャー教室を開いたりすれば、地道な宣教活動になるのではないかと考えています。また、敷地内にフランスの巡礼地ルルドの水を活用した「泉水の丘」を造れば、病者の癒やしの間として役立つのでは」と、夢は広がる。